



ご近所トマソン隊

by うさお



秋も深まって街には枯れ葉の舞い散る季節になりました。いつものことですが、トマソン隊ってあまりにいたテーマがない。連続もののように見えて、その実あまり関連性がない。どこから読んでもよいお手軽なもので、何処を切っても金太郎飴なのである。それにトマソン隊の知識は、知ってても得にはならないしね。

と前振りが長くてすいません、今回は左の写真の川越名物、「芋」がテーマです。

こんな薩摩芋のような体型の犬は、そんな所そこいらにはいません。秋の葉に想いをはせる「ライ隊員」です。そっと前に出した左手がいいらしいです。

その「ライ隊員」が興味を示したものが、これ！
いわゆる紋所です。



場所は鎌倉、鶴岡八幡宮の参道です。マンホールに浮かび上がった紋は「笹竜胆」。源氏正嫡の紋です。

各々の家の家系を辿れば、「源平藤橘」の四姓に往きつくそうですね。鎌倉幕府を興した源頼朝に因んだ「源氏」の紋所がこれ。北条政子の紋所は少しひしゃげた三つ鱗。



私の家の家紋は、表紋が「剣方喰」、裏紋が「鷹の羽のぶっ違い」（赤穂浅野家の紋とは上下の重なりが逆）です。



ものの本によると、方喰紋は遠目で見ると葵の紋に見えるところで、江戸時代は所謂「御止め紋」になっていたらしく、徳川氏の末にでもいなきや使うと罪になった紋です。そういえば松平氏の末の益田一族の紋は「方喰」なんだそうです。

だからといって、**うさお**が徳川家に繋がっていると思っちゃいけませんぜ。まったく関係がありません。

ご先祖が、「増田」と言う姓を「益田」に代えたんだそうです



よ、幕末だか明治にね。その前は「津久井」だとか・・・おやおや・・・。

まっ、兎も角、うちは藤原氏の流れだそうで、それも蝦夷藤原らしいです。藤原藤太秀郷のこともね。平将門やムカデ退治で有名な武将ですが、とても強かったらしく恐れをなした朝廷が蝦夷人の彼に藤原姓を賜ったとか・・・元の名前を「田原藤太」と言い、北関東の豪族でした。藤原氏の家紋は藤だと思われていますが、あの公家さんの藤原氏は、九条・二条家以外は藤紋ではありません。家来だった武士団の藤原氏の末が、藤紋を用いています。藤原



秀郷の一門は、佐藤・武藤・近藤・尾藤・首藤・後藤さんがそれ、藤原利仁の一門が斎藤・加藤・進藤になっています。

閑話休題。とまれ、鎌倉は笹竜胆のメッカ、上の写真をご覧あれ。蒲鉾屋だったか、履物屋の壁にもペタンと・・・。

でもなにか線の細い、貧相な笹竜胆だなあ。

コリヤ面白いというわけで、ちょいとこの手のものを集めて見ましょ。

お馴染み、**Cacco**、**うさお**のご近所案内図です。赤の破線がライ隊員のお散歩コースですが、そのついでにマンホールの蓋を激写、その数を調べてみました。

多い、多いですう。ざっと数えただけですけど下の表ほどありました。

蓋の名前は私が勝手に付けました。多寡が200mの間に、33近くもあるとは、驚きです。

さて私の知る範囲では、上水は地上から1.2m位の深さに、下水は2.5m位に埋まっています。

最近では、上水は浅層埋設といって0.8m位の所に埋めるのが流行です。

左の蓋は雨水流入管の柵にあるものです。ちょいと見は、スパイダーマンを髣髴とさせるも

蓋の種類	個数
みなとみらい	6
空気弁	1
仕切り弁	3
亀甲	15
雨水	2
消火栓	3
NTT	1
小さい	1
おすい	1
	33



のがあります。このバージョン以外に「雨水」と書いたものがあります。

これは川の近くや家の前の幹線道路に点在しています。数は多くありません。上の表で「雨水」と書いてあるものがそうです。

次は、最も数が多かった「亀甲」です。ハニカム模様がとっても亀さんです。これは下水のマンホールのようなのです。しかし、こんなデザインって一体誰が考えるのでしょうかね。

歩道際の下水枡にも「横浜市」のマークが・・・。



結構凝っている

じゃないか。こんな町でも。ちょっと感激です。先ほどの「雨水」は、川に流れ込みますが、下水は本管を通して污水处理場に行きます。

地面の下は穴だらけのような気もするなあ。



さて次は圧巻、派手な消火栓マンホールです。ご覧の代物で何の説明も要りませんが、ひとつだけ、

「防火水槽」のものがあります。これがなんとパン屋さんの前の歩道にあります。この歩道に下に大きな水槽があるのでしょうか？しかも、いつそんなことをしたんでしょうね。

この「防火水槽」にだけ厳しくも立派な消防局のマークが入っています。真ん中にある「40」って数字はさて、何を意味しているのかな。昭和40年に作ったってことかな？

河川は国土交通省、消防は総務省、上下水道は地方自治体、神奈川県、横浜市の管轄です。工事をする人は、この辺の切り分けが大変でしょうね。





さて次は、「空気弁、仕切り弁」と名付けた蓋です。ここより南のほうに5 kmほど行くと、海岸ぺたに「日本鋼管」やら「旭硝子」やら「東芝」などの工場があります。ここに送られる「工業用水」のものらしいです。昔、夜通し家の前で工事をしていたのでよく覚えています。

この蓋には七宝焼きのような青い噴水マークが付いています。の割りに、何か男らしさを感じさせる無骨さがあります。



左手の文様は何でしょう。「川」って云う字かな？「水」かもしれない。水の流れかな？これも横浜市のものだと言うことは判るが、所轄はどこになるんだろう。いろいろなお役所の聞き合いが目に見えるようですね。



そしてこれは、この中でとってもお気に入りの「**みなとみらい**」の蓋です。

なんだかよく判りませんが、ノスタルジックな感じがします。この蓋は「亀甲」に続いて数が多いのですが、家の前の県道の大通りにしか見当たりません。それでもこの数です。入江町の方まで探せばもっとあるでしょう。

しかも最近、埋け込まれたようで、周りのアスファルトが新しいのでそう思います。用途はさっぱり判りません。

水道関係は事足りてますよねえ。道路路管理用の通信線のものかもしれないなあ。いや、何が埋まってもいいんですけどね。最近は水道だけでなく、電力



線、ガス管、通信線と埋まっているものは多岐にわたりますものね。しかし、この絵柄はどう見ても、こりゃあベイ・ブリッジですぜ、あの三径間連続トラス斜張橋（いわゆる吊橋ね）のあれです。ちなみにベイ・ブリッジには、風による揺れ防止に振り子が付いていて、パッシブな制振（慣性力を利用して揺れないようにすること）しているとのこと。大黒埠頭のパーキングエリアにその模型があります。



左のこれは、公園の中にあった街灯用の電力線用のマンホールです。落ち葉の中に埋もれて、ちょっと雰囲気ですね。

お互いに電力も電信も、地紋は和風で、着物の柄にでも見えそうな感じです。

そして最後はかわいらしい小物のマンホール蓋です。えへへ、マンホールの小紋のようなものですな。一番右端のものが、横浜市のマークが付いているものの、用途が判らないもの。多分、汚水枡でしょうね。真ん中是一目瞭然、「おすい」です。そう書いてあります。左端は水道の検針用のメータか、分岐水栓が入っていると推察します。

こんな狭い地域で、しかも道路2本の中でこんなにマンホールがあるなんて、今まで気が付きませんでした。と言うか、見逃しておりました。

ものの始まりは、家の前のマンホールの蓋が最近、車に踏まれるとターン、ターンと音がするようになったからです。五月蠅いなあと二階の窓から見てみると、あれっ、一杯あるじゃないか、蓋が・・・。

で、ライ隊員と調査に出かけたのでした。俵の看病をしに病院に行っていた **Cacco** 隊員は、「それって面白そうだったのにい」と怒っておりました。

そして右の蓋が、NTTの通信用のものじゃないでしょうか。中に光ファイバーなどのケーブルが仕込んだ洞道があるんですよ。





土田、岩下、野尻、福富、山脇さんが有名です。

名流では、伊井、久世、黒田、松平さんですが、伊井家はもともと藤原氏、下がり藤の紋です。（下がり藤は内藤氏が有名※）家の井戸の周りに橘の木があったので、橘紋になったのだとか。結局、家紋と家柄の関係はインチキです。ご存じでしょうか、室町時代から戦国時代には、貧乏なお公家さんは家紋の切り売りをし、明治維新では、今まで名字、家紋が与えられなかった平民にも、自由に付けることができるようになりました。大東亜戦争の後の闇市で名家の家系図が売られるようになり、混乱に乗じて財を成した者たちが、次は名声を求めて買い漁り、俄か名士が急増しました。

「わたしゃ**うさお**って言うんだが、手頃な家系図、無いかね？」

「**うさお・びんらでいん**氏のものならありますが・・・」

「いいねえ、貰っておこう。幾らだい？」てな具合です。

※江戸時代の手鞠歌です。以前にも書いたかもしれませんが、「牡丹に唐獅子、竹に虎、虎を踏まえた和十内、**内藤様は下がり藤**、富士見検校後ろ向き、剥き身、赤貝、ばか、柱、柱は二階の上と下・・・」と唄われております。

同じく川越の喜多院の用水桶には、「丸に二つ引き両」紋があります。真横や縦に一本から三本の



はい、恒例のおまけのページです。本来のテーマからはずれて来ちゃったものを載せるページです。鎌倉の「妙本寺」の雨水受けだか、天水桶だかにあった笹竜胆の紋所です。昔は寄進をした人の功德を讃えて、このように家紋を入れたのでしょうか。

この近くの日蓮宗の本覚寺さんは、橘の紋所が目につきました。鎌倉という場所柄、蒙古襲来を法力で退けた日蓮さんを信奉する鎌倉武士に橘家のものがいたのでしょうか。

さて橘紋は、中井、橘、薬師寺、山崎、



線を引いたものを、引き両紋といいます。かつて將軍家の白幕（源氏）に遠慮して、二本ないし一本の線をその陣幕に引いたのが始まりだとか。引き両は雨の神、水龍を表したものとされています。

源氏の一派である足利氏は「二つ引両」の紋を用いています。新田氏も足利尊氏に敗れて後、同紋を用います。川越は足利氏、新田氏の勢力が及んだ地と考えられますので、このような紋が残ったのでしょうか。